

龍谷大学アジア仏教文化研究センター ワーキングペーパー

No. 13-8 (2014 年 3 月 31 日)

(2012 年度公募研究成果論文)

亡命チベット人社会における仏教と平和思想 —その現状について—

日高 俊

(大谷大学非常勤講師, 2012 年度 BARC 公募研究員)

目次

はじめに

1. 亡命チベット人およびダラムサラについて
2. 「焼身自殺」はどのように伝えられているか
3. 仏教で自殺がどのように規定されているか
4. 亡命社会での「焼身自殺」の評価

まとめ

【キーワード】: ダライラマ 焼身自殺 ダラムサラ 亡命チベット人

はじめに

平和思想と仏教思想との関係というテーマにおいて想起されるのが、ダライラマ 14 世を代表とする亡命チベット人たち、およびその運動である。彼ら亡命チベット人は世界各地に集住しているが、インドに最大の人数が暮らしており、その中心である亡命チベット政府およびダライラマの居所もまた北西インド・ダラムサラにある。

ダライラマが主張し、亡命チベット人社会でも広く受け入れられている非暴力主義（平和主義）は、仏教思想を基としている。亡命政府の元首相サムドンリンポチェは、中国など敵へ憎しみや怒りを抱かず、更には暴力も振るわないことで、その報いとしての更なる暴力を生まないようにするべきと主張している。これは、因果応報の考え方など仏教思想が、非暴力主義の重要な原理となっていることを端的に示す事例といえるだろう¹。

一方、中国政府によるチベット仏教などへの抑圧という状況を受けて、亡命チベット人社会および中国領チベットにおいて民族主義が広がりつつあるのも事実である。そのなかでは非暴力主義を、武装闘争による独立への妨げとする主張さえもみられる。

このようななか、2009 年より東チベット（四川省西部）を中心に起こったのが、チベット仏教徒の「焼身自殺」²事件である。東チベット・キルティ僧院で始まった「焼身自殺」の動きは、チベット全域に広がり、やがてデリー、カトマンズにおける亡命チベット人、およびチベットを支持する外国人のなかにもそれを行なう者があらわれた。そしてその事件は、2008 年のチベット蜂起以降、チベットに関する最大の事件として日本含む世界全域で報道されることとなった。

では、世界的な注目を集めたこの「焼身自殺」は、亡命チベット人社会においてどのように受け入れられたのだろうか、そしてそれは彼らの考え、特にそのなかにある仏教思想および非暴力思想にどのような影響を与えたのであろうか。本研究の目的は、これについて解明することである。それによって、亡命チベット人社会における非暴力思想および仏教思想の現状について、ある程度の理解を得られると考えられる。

研究方法としては、亡命チベット社会において公的・私的を問わず出版されている新聞・書籍など出版物の分析を行う。それとともに、ダラムサラを訪問し、そこを中心に最新の出版物の収集および聞き取り調査なども行う。これらによって、2012 年における緊張の亡命チベット人社会への受容、そしてその非暴力思想および仏教思想に対する影響について分析することとする。

1. 亡命チベット人およびダラムサラについて

本論を開始する前に、亡命チベット人およびダラムサラにおいて概説する。第二次世界

¹ 辻村優英「カルマの倫理性：サムドン・リンポチェのサティヤグラハ」『宗教と倫理』6, 2006, pp.17-31。

² ここで「焼身自殺」という言葉を用いたが、亡命チベット人社会における出版物などでは、この言葉は用いられることは少ない。それはチベット語では「自身の体を焼く」意である rang lus mer sreg, 漢語では「自焚」、英語では Self Immolation（自己犠牲）として表される。「自殺」という言葉が避けられること自体、その行為が仏教において肯定的に捉えられていないことを指し示している。これについてはのちに詳述する。このような状況を鑑み、本稿ではこれについて「」付きの「焼身自殺」とする。

大戦および国共内戦後、1949年10月1日、中華人民共和国を成立させた毛沢東は「チベットの解放」を宣言して人民解放軍を派遣した。軍は1950年には東チベットの要衝チャムドへ進み、1951年にはラサへと進軍、チベットは中国共産党政府の支配下に入った。

当初には衝突は少なかったともされるが、すぐに支配に対するチベット側の不満が高まり、東チベットからチベット人の蜂起が始まることとなった。これに対し、中国政府は軍事的「鎮圧」を続け、混乱の中1959年にダライラマ14世はインドへと亡命した。

1950年代から現在まで、多くのチベット人がヒマラヤを越えてインド、ネパールに亡命した。現在では、本土でチベット語、英語などの教育を十分に受けられないことを理由に、親が子供のみ亡命させることも多くなっている。

2008年の「ラサ蜂起」以降においては、中国政府の国境での監視強化、及び中国政府の圧力をうけたネパール政府の難民受け入れ縮小などにより、その新入は減少傾向にある。その一方、14世の亡命から50年以上が過ぎたため、亡命チベット人のなかではすでに第2世代、第3世代も誕生しており、その総数は145150人（2007年）とされる。

亡命チベット人であるが、インド、ネパール、ブータンといったヒマラヤ周辺諸国、アメリカ、ヨーロッパ（スイスが最多）、カナダなど欧米諸国、および台湾、日本などに居住している。そのうち半分以上が居留しているのがインドである。彼らの多くはヒマーチャルプラデシュ（H.P）州、西ベンガル州（W.B）北部などのヒマラヤ周辺、及び南インド（カルナータカ州）にあるインド政府提供の Settlement（入植地）に住む。ほかにデリーのマジュノカティラなど都市にもチベット人街がある。

亡命当初チベット人は困窮のなか道路工事などで糊口を凌ぐ状態であった。しかし、そののちに亡命政府の政策および諸外国の援助により、カーペット、セーターなどの毛織物業、手工業などが振興され、それが現在の主な産業となっている。初期に亡命してきたチベット人のなかでは、ホテルを経営するなどして商業的に成功、不動産などの資産を持って、インド人・ネパール人を雇うものもあり、近年亡命してきた貧しい亡命者との格差も広がっている³。

今回の主要調査地であるダラムサラは、ヒマラヤ西南麓、ヒマーチャルプラデシュ州南西部にあるダライラマ14世の居所、チベット亡命政府などが存在する亡命チベット人社会の中心地である。緯度は低いが、標高が1300～1800mと比較的高い丘陵にあるため、気候は温暖湿潤である。もともとは英領インド時代にイギリス人の避暑地として作られた街だが、1905年に地震で壊滅、1960年にインド政府からダライラマにその跡地が提供され、以

³ ダラムサラで雇われているインド人には、現地住民のほか、インド北東部ビハール州出身者が多い。ビハール州はインドで一番貧しく、賃金が安い地域であるほか、この州にある仏教聖地（釈尊の成道地）ボーダガヤに特に冬季に巡礼に行く亡命チベット人が多いため、その際に雇われていると思われる。また、これらビハール州出身のインド人のうち多くの割合を仏教徒が占めている。このインド人仏教徒の大半は、アンベードカルとともに改宗したアウトカースト出身の新仏教徒たちであると思われる。ダラムサラなどチベット人コミュニティにおける彼らインド人新仏教徒たちと亡命チベット人、および当地を訪れる外国人の関係については一考を要するだろう。このほかダラムサラではパンジャブ州などのシク教徒および、カシュミール出身のイスラーム教徒が商店を運営するなどしている。

後亡命チベット人の街となった。街はインド人中心のロウワーダラムサラと、亡命チベット人中心のマクロードガンジ（アッパーダラムサラ）に分けられる。マクロードガンジの住民は現在 6000 人程度である。ロウアーとアッパーの間には、亡命チベット政府の官庁街ガンチェンキションもある。

マクロードガンジなどには、チベット文化に触れることなどを目的として多くの外国人が訪れており、バススタンドからツクラカンへと向かう Temple 通りは、「世界で最も国際的な通り」とまで呼ばれる。外国人向けのレストランなども数多い。

2. 「焼身自殺」はどのように伝えられているか

以下に亡命チベット人社会で「焼身自殺」がどのように論じられているかについて述べる。本節では、まず「焼身自殺」が亡命チベット人社会でどのように伝えられているかについて、出版物などを用いて論じる。

まず、新聞・報告書類について示す。亡命社会における出版であるが、亡命政府などの公的機関のほか、NGO、個人などにより基本的に自由に行われている。このうち新聞、とくにチベット語のものとしては亡命政府発行の官報 bod mi'i rang dbang (Tibetan Freedom, 週刊) のほか、民間発行の bod kyi bang chen (The Tibet Express, 週刊), bod kyi dus bab (Tibet Times, 隔 10 日刊) などが存在している。

新聞記事の内容であるが、一面トップはダライラマ、あるいは亡命チベット政府首相の行動が載ることが多い。そのため「焼身自殺」の記事はおのずから二面以降、一面でもトップ以外に記載されることとなる。これらの記事の情報源であるが、中国政府による公式発表のほか、現地からの報告も用いられている。またその書かれ方であるが、叙述的・感傷的に世論を煽りたてるようなものではなく、淡々と事実のみが述べられたものが多い。

新聞のほかの出版物類、報告書・雑誌などにおいても、もちろん「焼身自殺」に関する記事が記載されている。その情報源・記事内容も新聞のそれと類似したもので、その点において注目すべきものはない。

特筆すべきはその数の少なさである。調査を行なった 2011 年 8 月現在、「焼身自殺」について専門的に取り扱った出版物は管見する限り小さなパンフレットが 2 部のみであった。それは、2008 年のラサ蜂起に関するもの⁴と比しても圧倒的に少ないものである。

このほか、亡命チベット人のみならず、世界全体に発信されているものとして、インターネット上のサイトがあり、Central Tibetan Administration (<http://tibet.net/>), Tibetan Centre For Human Rights and Democracy (<http://www.tchrd.org/>), Phayul.com (<http://www.phayul.com/>)などで、情報（画像、動画含む）が公開されている。

⁴ 2008 年のラサ蜂起に関しては、亡命政府議会による公式の報告のほか、NPO などが私的に編纂した報告書類が出されている。それらの多くは数百ページにわたる大部のものであり、従ってそこに含まれる情報も多い。その内容も、「蜂起」について、その経過およびそれに対する諸外国の反応についてまとめられた報告書から、事件に対する、チベットよりの考え方をもち中国人の反応をまとめたものまで多岐にわたっている。

インドにおいては街頭に政治的な掲示が多くあり、ダラムサラの亡命チベット人社会でもポスターが多く貼り出されている。ダラムサラにおいて、そのような掲示がもっともなされるのは14世の居所に隣接する街の中心的寺院ツクラカン前である。

2012年8月の段階においては、その場所には *Sacrifice of Life for Tibet* という題名の付された「焼身自殺」者の顔写真一覧が看板として掲げられていた。

この展示は亡命チベット人社会最大の NGO であるチベット青年会議 (Tibetan Youth Congress, <http://www.tibetanyouthcongress.org/>) が行っているものである。この NGO は、ドライラマの主張する「高度な自治」路線に対し、より強硬な「独立主張」路線をとっていることでも知られ、そのため、中国政府から独立派「蔵青会」として攻撃されていることでも知られる⁵。

このほか、ツクラカンそばにあり、中国のチベット支配およびチベット人の亡命などについての展示がなされている亡命政府による「公立博物館」といえるチベット博物館 (Tibet Museum) においても、「焼身自殺」者についての説明が4面に書かれたモニュメントが展示されていた。このように、亡命チベット人社会では NGO、「公的機関」とともに「焼身自殺」の掲示がなされている。

にもかかわらず、ダラムサラ全体では「焼身自殺」に関するポスター掲示は比較的少ない。また、ツクラカン前の掲示、博物館展示双方とも、顔写真と文字だけで構成されており、センセーショナルなものではない。本土での「焼身自殺」を受けてデリーで亡命して間もない者が行なった「焼身自殺」の生々しい現場写真などが載せられたポスターもあるが、これは表通りではなく、裏通りにしか貼り出されていなかった。そして、そのポスターの総量も、2008年の「蜂起」とそれに対する中国政府の「弾圧」に関して貼り出されていたそれと比べて非常に少ないものである。

このような自粛ともとれるムードを象徴するのが、一連の「焼身自殺」の始まりとなった東チベット・キルティ僧院のインド再建寺院⁶である。キルティ僧院は、ツクラカンのそばにあり、2009～2010年には寺院の建物内に中国政府の「弾圧」に関する写真パネルを展示するなど、ダラムサラの寺院のなかでも強硬姿勢をとっている寺院であった⁷。本土とインド再建寺院には交流があると考えられるため、インド再建寺院のこのような姿勢が本土の僧院での「焼身自殺」の始まりに影響を与えた可能性は高いといえる⁸。

⁵ チベット亡命社会には数多くの NGO があり、多くのものの本部はダラムサラにある。これらは海外の支援組織および亡命政府などから援助を受けて、亡命政府とともに亡命チベット人の支援などを行っている。

⁶ 亡命チベット人たちは、諸外国の援助などもうけながら、インドやネパールなどにおいて僧院を再建した。このような再建寺院としては、南インドにあるガンデン・デプン・セラのラサ三大寺などがある。一方、チベット本土の僧院は、中国政府がチベットを「解放」して以降、とくに文化大革命期においてその大部分が破壊された。しかし、そののちに再建が開始され、改革開放以降には沿岸部の漢人仏教徒の支援もあって復興が進んでいる。一般的には、一度破壊され、また政治的な影響を受けている本土の僧院より、インド再建寺院のほうがチベット仏教の伝統を多くのこしているとされている。

⁷ 著者がみるかぎり、このような展示を行っていたダラムサラの寺院はここだけであった。

⁸ 2008年以前において中国政府が比較的寛容な政策を取っていたこともあり、チベット本土の寺院とそのインド再建寺院のあいだには、再建寺院の高僧が本土の寺院を訪問するなど公式な交流があった。中国政府の情報統制、および再建寺院側の本土の僧侶への安全への配慮もあって、情報がほとんどないため証明

しかし、僧院の強硬姿勢を示していたパネルは2012年8月には外されていた。もともと強硬的な態度を取っていた寺院が、「自らの僧院」で起こった事件に対する展示を行っていないこと自体、不自然なことである。ここからもダラムサラにおいてある種の自粛ムードがあることが読み取れるだろう。

これまでのことをまとめるに、一つのことが浮かび上がる。それは、亡命社会において「焼身自殺」の記事が確かに伝えられているが、それを煽るようなセンセーショナルな伝えられ方はされておらず、場合によっては自粛といってもよい状況にあるということである。その理由について、まず、仏教で自殺がどのように規定されているかを論じ、それをもとに、「焼身自殺」への公的な評価、新聞のコラムなど私的な評価（肯定的・否定的両面が存在）をみていくことで論じる。

3. 仏教で自殺がどのように規定されているか

ここでは、亡命チベット人社会における「焼身自殺」についてみていく前段階として、そもそも仏教において自殺がどのようにみられているか、先行研究などをもとに論じる。

仏教における自殺に関しては、とくに大乘以前のそれについて考察が行われている。笹森行周氏は、それらの先行研究をも参考にしたうえで、

律文献・經典では自殺を容認しないが、經典には仏が自殺した仏弟子に対し、自殺以前に涅槃に到達していたので問題ないとされる事例が説かれた。『大智度論』・『弥勒菩薩所問經論』においては自殺は問題ないと解釈され、一切の問題の根本解決につながる解脱への道は三毒を滅することであると説いた。このようなことから仏教では自殺に対し、基本的には戒律に触れるとしながらも、様々な自殺の事例ごとに対処しようとしたことがうかがえる⁹。

としている。このように、仏教において自殺は基本的には否定されている。しかし、それは部分的には肯定的にとらえる可能性をもつものともされている。その時重要視されるのはその行為者が三毒を滅しているか否かである。

次に、チベット仏教では自殺に関してどのように認識しているのかについて述べる。とくに現在のそれについては、やはりダライラマの言をみるのが重要と思われる。これについては、一般書ではあるものの、『ダライ・ラマ「死の謎」を説く』に、大谷幸三氏のイン

はできないが、非公式な交流もあったことは確かであると思われる。そしてそのような交流は、2008年以降、中国政府の締め付けが厳しくなったのちもおそらくは存在するであろう。

⁹ 笹森行周「仏教では自殺をどう見るか」『印度哲学仏教学』23, 2008, pp.212-225。このほか、笹森氏も参考になっている仏教と自殺に関する論考としては、高木宗監「現代人の自殺と仏教の自殺観」『仏教史仏教学論集：野村耀昌博士古稀記念論集』春秋社, 1987, pp.237-258, 藤田宏達「原始仏典にみる死」『仏教思想10 死』平楽寺書店, 1988のpp.74-80, および玉城康四朗「死」の覚え書き『仏教思想10 死』, 同上のpp.470-477, 関稔「自殺考」『インド哲学と仏教：藤田宏達博士還暦記念論集』平楽寺書店, 1989, pp.255-274, および石井公成「不殺生と殺生礼賛（戦争）—仏教と戦争の関わり—」『現代と仏教』佼成出版社, 2006, pp.190-205 などがある。

タビューに答える形で述べられている。

キリスト教によれば、自殺は罪である。では、仏教の教えによれば自殺はいかなるものと考えべきか。もちろん、一般的に言って、仏教の世界観に照らしても自殺は悪しき行ないであることに変わりはない。…自殺においては、己自身を殺すという動機は存在する。また、その行為は現実遂行されている。だが、あなた自身が死ななければ自殺が完成しない以上、あなた自身が己を殺すという行為を完遂させることは不可能だ。真の意味で自殺は成立しないということになる。だが、やはり自殺は悪しき行ないであることに何のかわりもないのだが¹⁰。

というように、こちらでも基本的に自殺が悪、すなわち戒律に触れるものであることを明示している。しかし、その一方でダライラマは、

しかしながら、自殺はなべて悪であるとは言い切れない。ある特定の、非常に限定された状況において、自殺は許される行為となりうることを言うっておかねばならない¹¹。

とし、許される行為の例として、1960年代に中国当局に逮捕され、人民裁判で鞭打ちの刑が言い渡された高僧が、その夜に瞑想のなかで自殺をおこなった事例をあげ、それについて、

なぜならば、彼が一日生きながらえればその分だけ、数日生きながらえればより多く、他者に悪しきカルマを積ませることになっただろう。鞭打つ刑吏や拷問者は彼を苛むことで悪しきカルマを蓄積することになったわけだから。他者に悪しきカルマをもたらすことを避けるためには、こうした自殺は許される¹²。

としている。ここで自殺を行なった僧侶が許されるのは、その動機が刑吏や拷問者に悪しきカルマを蓄積させないことだったことだからである。この点で、この高僧の行為は上記の三毒から離れていたものといえるだろう。その上でダライラマは、

だが、よく肝に銘じておくべきだ。仏教徒にとっても、自殺は悪しきことである。極力、自殺は避けねばならない。ここで私が述べたことは、あるきわめて限定された極限状況の中で、例外的に自殺も否定されない場合があるということである。いかなる場合も、自殺を絶対的に罪だとするキリスト教との違いを覚えておけばそれでいい¹³。

¹⁰ ダライ・ラマ『ダライ・ラマ「死の謎」を説く』角川書店、2008、pp.43-44。

¹¹ 同上、p.45。

¹² 同上、p.47。

¹³ 同上、p.49。

としている。以上のように、ダライラマの自殺観もまた、非常に限定された状況ではそれを許されるとしながらも、基本的にはそれを否定するものである。このようなチベット人の自殺観は、2010年の「焼身自殺」の発生以前におこったチベット仏教徒の自殺に関する記述にもみられる。

東チベット・セルタにあるニンマ派僧院ラルンガル寺は、1980年創設と新しいものながらも、その院長ジグメ・プンツォク師の優れた指導が評判となって、最盛期には一万人以上の規模を誇る大寺院となった。そのころにはチベット人のみならず、漢人僧尼や漢人信徒、台湾やシンガポール等東アジアの仏教圏からも僧尼や信徒が集まっていたとされる。

しかし、このような状態を中国当局が危険視しないわけがなく、2000年～2002年ころにかけて、学院は尼僧の放逐、僧坊の撤去などの命令を受けることとなった。

こうしたなか、2001年にラルンガル僧院の「縮小」をうけて、チベット人および漢人の尼僧の自殺がおこった。以下は、2009年に出版されたラルンガル僧院の歴史について扱った書物中におけるそれに対する記述である。

破壊と追放が行なわれた時に、何人かのチベット人・漢人の尼が絶望のなかで自殺している。例えば、尼ワンモは木で首つり自殺した。彼女は、東チベットのカンゼ地方のダクゴ県で、父サンゲープンツォクおよび母ソンラのもと生まれた。2001年8月12日に、当局がラルンガルを離れることを彼女に強いた時、彼女のための代理家族および家のようなもの〔である僧院〕から離される苦痛に耐えられずに、彼女は自殺した。同様に、漢人の尼が、彼女の住宅のなかで自殺をした。彼女の遺書には、政府の圧迫が今世にイシーノルブから教えを受け取ることが不可能にしたので、彼女が来世に去ることを強いられたとされていた。彼女は、来世では、自由にイシーノルブから教えを受け取ることができるだろうように祈っていた。

同様に、漢人の尼が、彼女の住宅のなかで自殺をした。彼女の遺書には、政府の圧迫が今世にイシーノルブから教えを受け取ることが不可能にしたので、彼女が来世に去ることを強いられたとされていた。彼女は、来世では、自由にイシーノルブから教えを受け取ることができるだろうように祈っていた。

中国の僧を含むさらに多くの学生が自殺をしたと考えられるが、著者はそれらの学生たちの詳細を得ることができなかった。更に、狂的な破壊および追放によって、多くの僧および尼（特に中国の学生）が精神の平衡を失った¹⁴。

¹⁴ gser rta tshul khrims The Glowing Legacy kha ba dkar po bod kyi rig gzhung sri zhu khang 2009, p.82 While the demolitions and expulsions were being carried out, some Tibetan and Chinese nuns committed suicide in their desperation. For instance, nun Wangmo hanged herself from a tree. She was born to father Sangay Phuntsok and mother Son-lha, based in Dakgo township in the Karze region of eastern Tibet. On 12 August 2001, when the authorities forced her to leave La-lung Gar, she took her own life since she could not bear the pain of parting from what was like a surrogate family and home for her. Similarly, a Chinese nun committed suicide in her residence. Her suicide note said that as the state oppression made receiving teachings from the Well-fulfilling Gem impossible for this

以上でみられるように、記述では自殺を苦痛に耐えられなかったものとして、それに肯定的・積極的な意味づけがなされていない。ここからも、チベット仏教の伝統においても、自殺は単純に肯定的に取られうるものではなく、むしろ否定的にとられるものであったのは確かである。

従って、以下に述べる亡命チベット人社会における「焼身自殺」の評価においても、それがダライラマのいう他人に悪しきカルマを積ませるような「極めて限定された状況」でなされたものであるのか否かということが重要となっている。その点に留意しながら、以下に亡命チベット人社会における「焼身自殺」の評価についてみていく。

4. 亡命社会での「焼身自殺」の評価

「焼身自殺」に対する評価について、本節において、公的なもの私的なもの両面からみていく。まず述べるのは公的なそれである。以下に亡命政府首相ロブサンサンギェが 2012 年 3 月 10 日に行った宣言における焼身自殺に関する部分を訳する。

今日、チベットにはハnst、デモおよび平和的集会などのような従来の抗議の場所はない。そのため、チベット人は、2009 年以来「焼身自殺」をした 26 人のチベット人たちのように極端な行動をしている。法王ダライラマと CTA（チベット中央政府）は常にそのような激しい行動を思いとどまらせようとしている。しかしながら、我々の嘆願にもかかわらず、チベット人は 2012 年の 14 事例のように「焼身自殺」し続けている。責任は、硬直した強硬路線をとる北京のリーダーにある。解決もそうである。「焼身自殺」は、いわゆる「社会主義の楽園」の空虚な約束への明確な拒絶である¹⁵。

以上のように亡命政府首相は、「焼身自殺」を中国の弾圧に対する抗議行動として中国政府を批判する一方、その弾圧に対する「焼身自殺」を極端な激しいものとして完全に肯定もしていない。その評価はあいまいなものなのである。

このようなあいまいさの背景の一つには、「焼身自殺」を肯定的にとるか否定的にとるか私的にも亡命社会全体においても意志の統一がなされていないことがあると思われる。そ

life, she was forced to leave for the next life. She prayed that in her next life she would be able to receive teachings from the Wish-fulfilling Gem in freedom. Although many more students, including a Chinese monk, were believed to have committed suicide, this writer was unable to obtain the details of those students. Furthermore, in the frenetic demolitions and expulsions, many monks and nuns – particularly the Chinese students – lost their mental equilibrium.

¹⁵ Statement of Kalon Tripa, Dr. Lobsang Sangay on the Fifty Third Anniversary of the Tibetan National Uprising Day 10th March 2012 Today, there is no space for any conventional protests such as hunger strikes, demonstrations and even peaceful gatherings in Tibet. Tibetans are therefore taking extreme actions such as the one by 26 Tibetans who have committed self-immolations since 2009. His Holiness the Dalai Lama and the CTA have always discouraged such drastic actions. However, despite our pleas, Tibetans continue to self-immolate with 14 cases already in 2012. Fault lies squarely with the hardline leaders in Beijing, so does the solution. The self-immolations are an emphatic rejection of the empty promises of the so-called 'socialist paradise'.

れをよく表すものとして、次に私的機関により発行された新聞の肯定・否定双方の意見からなされたコラムについて示す。まずは 2012 年 6 月 30 日に bod kyi dus bab No.556 紙上に記載された tshe ring shAkya, chung tshe ring 両氏による「焼身自殺」に比較的否定的な社説である。

チベットの歴史を細かくみるならば、「焼身自殺」によって権力者に抵抗することと、「焼身自殺」によって供養なされたことの 2 つとも過去数百年前には確かにあったけれども最近の行為では何もない。…〔抗議の〕「焼身自殺」がされた場所は中央チベットのサムエ方面で、「焼身自殺」をした理由は、その時にチベットで広まっていた中国仏教の流儀の実行と守護のため、現在の言い方では、信仰の自由のためである。そうであるけれども驚くべきことに「焼身自殺」者はチベット人ではなく中国人であることと、「焼身自殺」で抵抗した場所は法王チソンデツェンによって統治された王宮である¹⁶。

この社説では、「焼身自殺」について、チベットの歴史上ほとんど行われておらず、特に「抗議」目的のものは、中国人仏教徒が「古代チベットの聖王」チソンデツェンに行ったもののみとする。その上で、著者はチベットで中国仏教が廃れたことをもって、「焼身自殺」が無効かつ、21 世紀にも適合しないものとする。

焼身自殺が「新しい現象」であることについては、フランスのライター Claude Arpi 氏が The Pioneer 誌に掲載した記事のなかでも、

究極の自己犠牲をしたほとんどの人々は若かった。彼らは 1959 年の暴動どころかチベットの戒厳令下(1988-89)にでさえも生まれていない。チベットの運動は、若く落ち着かない人々によって主導された「新しい現象」である¹⁷。

ここからみても、現在起こっている抗議のための「焼身自殺」は、伝統的にはチベット

¹⁶ tshe ring shAkya, chung tshe ring “bod kyi lo rgyus thog byung ba'i rang sreg gi gnas tshul khag gnyis gleng ba” bod kyi dus bab No.556 2012/06/30 bod kyi lo kyi lo rgyus la zhib blta byas na / rang lus mer bsregs kyis dbang 'dzin par ngo rgol byed pa dang / rang lus mer bsregs kyis mchod pa 'bul ba gnyis ka 'das pa'i lo lo brgya phrag mang po'i gong dngos su byung byung myong ba zhis las gsar pa gang yang min/……skabs der bod du dar du dar che ba'i rgya'i hwa shang gi ring lugs nyams len dang srung skyob kyi ched du yin zhing / deng sang gi bshad stangs ltar na / chos dad rang mos kyi ched du red / de bas kyang hang sang dgos pa zhis ni mer sreg mkhan bod mi ma yin par rgya mi zhis yin pa dang / rang sreg byas te ngo rgol bya yul ni chos rgyal khri srong khri srong sde btsan gyis bzung ba'i rgyal khang red /

¹⁷ Claude Arpi, “China needs the Dalai Lama” Phayul[Tuesday, May 29, 2012 11:14] (<http://www.phayul.com/news/article.aspx?id=31484&t=1> 2013/6/9 アクセス) Most of the people who committed the ultimate self-sacrifice were young; they were not even born during the 1959 uprising or even the martial law in Tibet (1988-89). For the Tibetan movement, it is a new phenomenon led by the young, restless lot.

に存在しなかった事象であるとみてよいといえる¹⁸。その背景に、上において述べた仏教における自殺に対する否定的な考えがあるのは間違いない。

では、この伝統に対し、「焼身自殺」に肯定的な人々はどのように反論しているのか、次に「焼身自殺」に肯定的な社説について示す。先にあげた *tshe ring shAkya, chung tshe ring* 両氏のコラムに対して、2012年7月25日に *bod kyi 'bang chen* 紙上において、*be ri dpal ldan rnam rgyal* 氏によって反対意見が挙げられている。

チベットのみでなくほかの国でも「焼身自殺」する僧侶と尼がいた。1948年にはハルビンの街で僧侶が毛沢東の仏教禁止運動に抵抗するために木屑を積んだうえに蓮華座をして油を入れて「焼身自殺」した。西暦1963年に *Thich Quang Duc* というベトナムの僧侶が「焼身自殺」した。そのときには北京政府がその僧侶の「焼身自殺」を広く賛美し、写真を何十万枚も印刷してからあちこちに広めて、アジアとアフリカのほうにアメリカの帝国主義によって圧迫がどのようにされたかを説明した。そののちにもベトナムの僧侶と尼がたくさん「焼身自殺」された。[以上のように] ベトナムの僧侶がアメリカ政府に抵抗するために〔行った〕「焼身自殺」運動が広まったとき、中国はそれへの支援だけでなく、写真をある限りの場所に配布して出来る限りの宣伝もしたのである。しかし、今チベット内で中共の圧迫に耐えられず「焼身自殺」の運動が広まるとき、〔中国政府が〕彼らは分裂主義者、テロリストなどと非難して圧迫を強め、関係者にも審問しているのは現実の状況と真実に違反する¹⁹。

ここでは「焼身自殺」を肯定的に評価するため、1948年の中国、1963年ベトナムの事例があげられ、抗議運動が正当化されている。このような正当化がなされること自体、世界における仏教徒の抗議の手法として、「焼身自殺」の情報が亡命チベット人社会に伝えられ

¹⁸ ガンデンポタン（ダライラマ）政権期に、何度かの政争が起こったが、その敗者たちは多く漠地などへの「逃走」をおこなった。ここからチベットの伝統的な抗議法は「逃走」であったと考えられる。それは現在の「亡命」にも通じるものといえる。

¹⁹ *be ri dpal ldan rnam rgyal* “rang lus mer sreg dang bod kyi gzhon skyes” *bod kyi 'bang chen* No.396 2012/7/25 bod tsam min par rgyal khab gzhan gzhan gyi gyi nang nang du'ang de 'brel gyi rang lus sreg mkhan gyi grwa pa dang btsun ma mang du byang yod de de / har b+hina (Harbin) gyo gron kher du grwa pa zhig gis mAo tsi tung gi nang chod bkag sdom gyi las 'gul la ngo rgol byed ched shing phyed spungs pa'i thog pad+ma'i dbyibs bzhin bsdad cing de'i thog thog snum blug nas rang nyid kyi kyi sku lus me ru ru bsregs yod 'dug phyi lo 1963 lor / Thiga khung g+huga (Thich Quang Duc) ces pa'i wi ti nam gyi gyi grwa pa des rang lus mer bsregs pa dang / skabs de dus pe cing gzhung gis grwa pa des rang lus mer sreg gi bya spyod de la bstod bsngags rgya cher dang / par de 'bum mang por dpar skrun byas nas gang sar sbyar 'grems byas pa dang / de yang e si ya dang a h+pha ri ka'i phyogs su a ri yis btsan rgyal ring lugs kyis btsan gnon ji ltar byas min gyi gsal bshad byed e thub mi thub bltas pa red / de'i rjes su'ang wi ti nam gyi gyi grwa pa dang btsun ma mang pos rang lus mer bsregs gnam yod 'dug wi ti nam gyi gyi grwa pa des a ri'i gzhung la ngo la ngo rgol ched rang lus mer sreg gi las 'gul spel skabs rgya nag gis de la rgyab skyor tsam du ma ma zad / de'i par gang sar bkram nas khyab bsgrags gang thub byas yod yod kyang kyang / da cha bod nang du rgya dmar gyi btsan gnon la mi bzod par rang lus mer sreg gi las 'gul spel skabs / de dag kha bral dang 'jigs skul ba sogs kyis bsnyad nas na gnon je cher dang de'i spun mched rnams la'ang 'dri rtsad byed pa de ni dngos yod gnas gnas lugs dang drang bden las brgal ba zhig red /

ていることを指し示している。その背景に、グローバル化の進展があるのは確かである。

そしてそのことは、チベット本土における「焼身自殺」の発生そのものにもグローバル化が影響している可能性を提示する。実際のところ、チベット人の最初の「焼身自殺」は、デリーにおいて 1998 年に亡命者トゥプテンワンチュクがおこなったものである。彼の「焼身自殺」に、先行する中国、ベトナムなどの事例が影響を与えていた可能性は高い²⁰。

亡命社会とチベット本土双方のチベット人が公式・非公式につながりを維持していることは、先述の通りである。このつながりをもとに伝えられたトゥプテンワンチュクの「焼身自殺」が、現在起こっているチベット本土における自殺の基底になったとみるのは決して飛躍ではないであろう。

チベットにおいて、文化・政治と仏教は密接不離なものである。従って、「焼身自殺」の正当化にもっとも有効なものもまた仏教の論理ということになる。とはいえ、先に述べた通り、仏教において自殺は単純に肯定的には捉えられていない。そのため、正当化の際には、その「焼身自殺」が、「悪くない」状況および動機でなされたものであれば許されることが主張されることになる²¹。

それは、亡命チベット政府の発行する英字雑誌 Tibetan Review 誌に記載された Tsewang Rigzin 氏の論文“Tibet self-immolations painful but inspiring”に象徴的にみられる。

私が考えるに仏教徒とは菩薩行をするものである。仏教の伝説では、仏陀の前生の 1 つで、飢えている雌トラの苦境に彼が自身の体を与え、虎が彼女自身の子を食べるのを防いだと私たちに伝える。別の伝説では別の前生で、航海の間に富を得るために船の中で 499 人の仲間商人を殺そうと計画した商人を仏陀が殺したとされる。これらの伝説は、結局のところ、人の行動が高貴かどうか判断するのは動機づけであることを明白に示している²²。

²⁰ なお、中国の事例はもちろん、中国仏教圏であるベトナムのそれにおいても、自殺を時の政治などに対する最大級の「抗議」として積極的・肯定的にとらえる中国文化の影響がある可能性は高い。中国における抗議の自殺については、上田信「そこにある死体―事件理解の方法―」『東洋文化』76, 1996, pp.65-93 など参照。

²¹ 注 17 のように「抗議」としての積極的な意味づけがなされる中国文化における自殺と異なり、今回の「焼身自殺」において、中国政府に対する抗議の側面は意外なほど強調されていない。その背景には、抗議が怒りの表現であり、怒りが仏教の三毒に含まれることがあると思われる。ダライラマもまた今回の事件を受けてなされた日本のジャーナリストのインタビューにおいて、

焼身自殺もひとつの行為です。ひとつの行為が悪い行ないなのか、よい行ないなのかを決める境界線は、その行為をしたときの心の動機によって決まります。その人が真摯な気持ちで仏教のことを考え、チベット人の人権を守ろうと考えてしたのなら、それはよい心の動機になります。そのような動機によって焼身自殺をしたのであれば、それはよい行ないになるのです。しかし、憎悪や怒りなど中国人に対する強いネガティブな感情に基づいてされたとしたら、その行為は悪い行ないになります。これが仏教的な判断の根拠です。なぜそのような行為をしたのかという目的も重要です。もし、仏教のため、正義のために行なったのなら、それはよい行ないであり、単なる嫌悪や、相手に恥をかかせようとするなど、他の人をひどい目にあわせる目的でしたのであれば、悪い行ないになります。(池上彰 『池上彰と考える、仏教って何ですか?』 飛鳥新社 2012, p.185)

と主張している。ここで重要視されるのもまた、その動機である。

²² Tsewang Rigzin, “Tibet self-immolations painful but inspiring” Tibetan Review May-June 2012,

ここでは、仏陀の前生伝説（ジャータカ）を用いて、「焼身自殺」が正当化されている。ここで特筆すべきなのは、日本でもよく知られる捨身飼虎における自殺の事例だけでなく、仏陀の前生が他の人々を殺そうとした商人を殺したという殺人の事例も出していることである。間接的ながらこれは、仏教の説話をを用いて殺人の正当化を行っているともいえる。

まとめ

亡命チベット人社会における「焼身自殺」の報道は、センセーショナルなものではなかった。その評価も公的なものは曖昧であり、私的なものでも肯定・否定双方が存在している。

このような曖昧な態度を生む背景には、殺生を否定する仏教と密接不離であったチベットの伝統のなかで、「焼身自殺」など過激な行動を行って抗議を行うことがなされてこなかったことがあるといえる。その一方、「焼身自殺」に肯定的なコラムは、中国、ベトナムなどの事例をもってそれを正当化している。ここからは、「焼身自殺」の正当化のみならずその発生においてもグローバル化の進展の影響があることを暗示している。

その一方、「焼身自殺」を正当化する際においても、伝統的な仏教説話もまた用いられる。そしてその正当化はときに自殺のみならず、殺人にさえも及ぶものである。殺人の正当化は戦争のそれへもつながるものである。ここからは、戦争にもつながりうる自殺あるいは殺人など「過激な行動」に対して、基本的には否定的に働きながらも、その正当化にも用いられる仏教の複雑な並列関係がみてとれるのである。

p.22 As a Buddhist I consider these as Bodhisattva acts. A Buddhist legend tells us that in one of his previous lives, the Buddha, moved by the plight of a starving tigress, fed himself to it and thereby also prevented the animal from eating her own cubs. Another legend has it that in another previous life, the Buddha killed a merchant who had otherwise planned to kill 499 fellow-merchants in a ship in order to acquire their riches during the voyage. These legends clearly show that ultimately it is the motivation which determines whether one's action is noble or not.